

生 *Seikatsu Bunkashi* 史

生活文化史

<史料館だより>

目次

- ◇新発見資料を含む住吉道沿いの道標について……………望月 浩 2
- ◇展示品との対話（一二）
 - 括猿（くくりざる）……………水口千里 6
- ◇トライやる・ウィークと史料館……………水口千里 8

2002.11.15
NO.30



JR住吉駅から北へ伸びる有馬道商店街。
かつては有馬へ向かう人々で賑わった。▶

神戸深江生活文化史料館

新発見資料を含む

住吉道沿いの道標について

史料館学芸員 望月 浩

神戸市東灘区の中央を流れる住吉川は、市街地を流れる川としては、清流として市民に親しまれている。川の西側には、「住吉道」と呼ばれる、かつて六甲山を越えて湯の町有馬へ通じる交通路があった。現在はハイキングコースとして市民に親しまれている。この有馬へ通じるルートはいくつかあるが、江戸時代には正規の街道ではないため、湯山間道と呼ばれ、しばしば宿駅との間で争論が起っていた。明治以後には、道の往来が自由になり、六甲山越えの道も多くの人が利用するようになるが、住吉道は有馬への主要道となり、有馬道と呼ばれるようになった。本稿では住吉道沿いの新発見の道標の報告を行い、かつ住吉道沿いに見られる有馬道に関わる道標を紹介していきたい。なお、文中の道標などに付けられた番号は、地図中の番号に一致する。

今回報告する新発見の道標(①)は、住吉川の西、住吉山手三丁目の山田区民会館前の住宅敷地内の道路際に横たわっている。

元は、すぐ南の住吉山手三丁目三の三叉路(住吉道沿いの有馬道)に関わる道標所在図の①に立てられていたのであるが、住宅改築の際撤去されたのを、前田氏が一〇年ほど前に自宅敷地内に移動させ保管したものである。前田氏は「由緒ある有馬道の名が見られる道標なので、いつかは立てられたら」と話されている。道標は花崗岩製。頭部が櫛型の四角柱で、総高は七八センチ。下部には根部と呼ばれる土に埋もれている部分が見られ、根部を除く部分の高さ



▲ ①今回新発見の道標

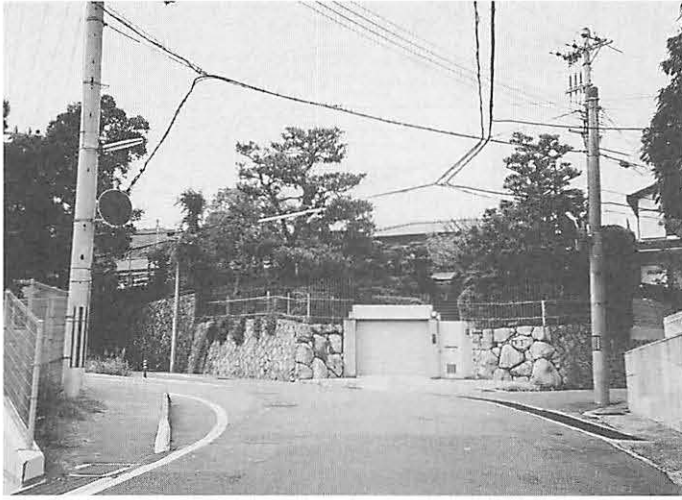


▲ ①新発見道標拓影

は五九センチで、幅は三一・五センチ、奥行きは一六・五センチを測る。正面の表面は研かれており、「元ありま道」と陰刻されている。側面は粗い加工痕が見られる素面で、背面は横たわっているため確認はできないが、移動された前田氏は正面だけにしか字は刻ま

れていなかったといわれ、背面の一部を見ると、側面と同じような粗い加工痕が確認できたので、字などは刻まれてないと思われる。「左」という字は俗字で、江戸時代によく使われているが、「ありま道」という書体を見ると、明治以降の近代の造立を思わせる。大正六年（一九一七）のお生れである前田氏が、「子供の時にはなかった。小学生の頃に立ったように思う」と言われているので、昭和初期に建てられたものであろう。

次にこの道標以外の、住吉道沿いにある道標を見ていきたいと思う。JR住吉駅の西北、住吉本町二丁目と二丁目の間の商店街が「有馬道商店街」とあり、有馬道の名残を止めている。商店街を南



▲ ①新発見道標がかつて立てられていた場所
(正面ガレージ扉付近)

へ下り、旧西国街道である国道二号線と交差する、本住吉神社の東南に高さ一七〇センチの大きな自然石の道標(②)が立っている。正面は表面が研かれていて、「有馬道 是ヨリ北江 九十丁」と陰刻されている。明治七年（一九三二）大阪―神戸間に鉄道が開通

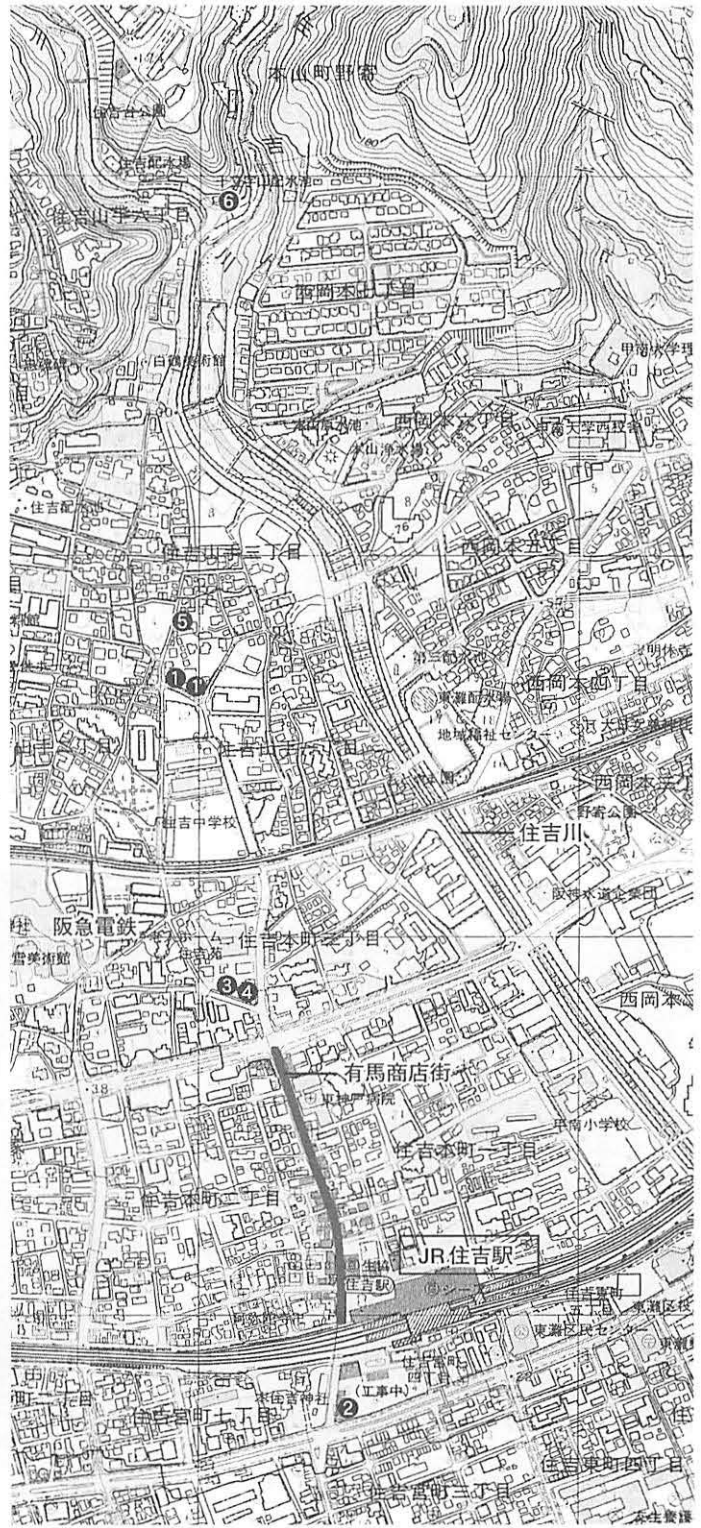


▲ ②本住吉神社東の道標



▲ 向かって右が③二本の道を示す道標。
左が④水車用水路に架かっていた極楽橋を
偲んで建てられた石標。

して、住吉駅が開設されると、六甲を越えて有馬温泉へ行く湯治客達の表玄関になった。利用する人が多くなったため、明治一〇年（一九三五）に道路を改修したが、この道標はその時に建てられたものと伝えられている。また、商店街を北へ抜けた三叉路に、高さ八〇センチの自然石の道標③がある。正面に「右モ 左モ 有馬道」と陰刻され、背面に「山本八郎兵衛外」と陰刻されている。六甲ライナー魚崎駅北側の花の広場に建てられている、魚崎村と住吉村の村界碑にも、住吉村の世話係として山本八郎兵衛の名が刻まれている。明治十四年（一八八一）の銘があるので、同じ時代に道標も建てられたのであろう。道標の左右に分かれた道は、銘文の通



▲ 住吉道沿いに建てられた有馬道に関わる道標所在図
(平成12年11月1日発行の国土地理院1万分の1地形図芦屋を利用したもの)

り、道の北方で合流している。道標の横に、高さ八二センチの自然石で、「極楽橋跡」と陰刻された石標④がある。かつて、白鶴美術館の上手から水車用水を引き入れた水路があり、この三叉路にある道標の前を南へ流れていた。北にある小林墓地（極楽浄土）に通じることから、この辺りに架けられていた橋が極楽橋と呼ばれていた。その橋があつたことを示す石標である。さらに道を北へ進み、前述の「左ありま道」の道標が立っていた三叉路を道標の指示どおりに左へ進むと、山田区民会館がある。さらに北へ行くと右手に一体の地藏立像⑤が見られる。傍に柿の木があることから、「柿の木地藏」と呼ばれている。地藏が乗る二段の台座は嘉永六年（一



▲ ⑤柿の木地蔵

五八三)の年号が見られ、遠く武蔵国(今の神奈川県)の人が有馬道の往来安全を願って建てたものである。しかし、大正一〇年頃(一九二一)に地蔵に牛をつないでいたところ、牛が暴れだして地蔵を倒し首が折れてしまった。今の地蔵はその後再建されたものである。江戸時代には住吉川沿いに水車産業が栄え、多くの水車小屋があった。その水車小屋で搗かれる米を運んだり、上流で切り出された御影石を運ぶのに、「ゴロタ」と呼ばれる牛に引かせた荷車が有馬道を行き来した。柿の木地蔵は、有馬道の様子を伝える地蔵である。柿の木地蔵から北にいくと白鶴美術館の横を通り、二つの谷筋が合流する落合橋に出会う。右の谷筋の道を入ったところに、高さ二〇〇センチの大きな自然石の道標(⑥)が立っている。これには正面に「昭和十三年七月五日 水災記念 右有馬道 左六甲道」と陰刻されており、昭和十三年(一九三八)の阪神大水害を記念して建てられた道標で、台座には当時の出水高が記されている。先に明治三二年(一八九九)の阪鶴鉄道(今のJR福知山線)の開通や昭和三年(一九二八)の神戸有馬電鉄(現神戸電鉄)の開通で、住吉から六甲山を越えて有馬へ向かう人は減少していた。そこへこの水害によって、有馬道は壊滅的打撃を受けたのである。その後、道



▲ ⑥昭和13年の阪神大水害の記念碑

は利用されることもなくなったが、現在はハイキングコースとして、休日にはハイカーたちで賑わっている。

この他にも、木藤精一郎著「六甲 北摂ハイカーの経」には、山中に二基の道標の存在を記しているが、現在は見当たらない。

こうして見ていくと、道標も明治七年の住吉駅開設以降に発展していった道であるために、道標も明治以降のものしか見られない。しかし、戦災や震災・水害などがありながら、失われずに立てられ続けた道標を今後も見守っていきたいと思う。

最後になったが、前田譲氏に多大なご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

△参考文献▽

山下道雄・沢田幸男・永瀬巖「神戸の道標」神戸新聞出版センター
神戸新聞社「兵庫の街道」のじごく文庫

沢田幸男「補遺 神戸の道標」

荒木勉「東灘区の道しるべ私家版」

谷田盛太郎「住吉村誌」住吉村

「住吉川清流の会二〇周年記念誌」住吉川清流の会

展示品との対話 (一一)

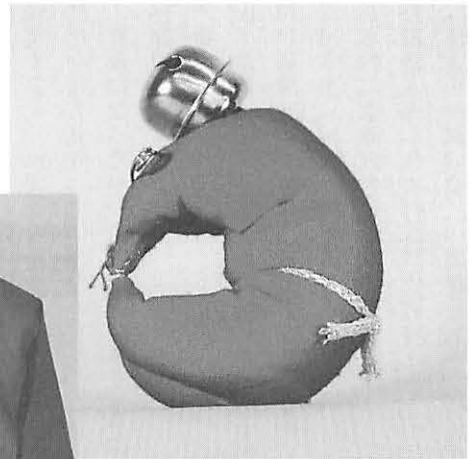
括猿 (くくりざる)

史料館研究員 水口千里

背をまるめて糸で手足をきっちり括られた一〇センチほどの真紅の猿。深江の町ではおなじみの「括猿」あるいは「魔除猿」は、祭りには欠かせない大切なお守りだ。安全と健康を祈願して、法被の背の「巴」と「稲穂」の紋のあたりにつけられる。現在、祭で使われる括猿は、すべて深江南町在住の北村さんの手によるもので、ひとつひとつ真綿を紅絹でくるんで鈴をつけられる。法被の鮮やかな藍と白に彩られると、紅絹のくっきりした朱がひときわ目立つ。

ところでこの深江の括猿、ひよんなことから海をわたってドイツの民族博物館で資料登録されることになった。今回の「展示品との対話」はその顛末記でもある。今夏、私はドイツの博物館にある日本コレクションの調査に出かけた。わずか二週間ばかりの滞在ではあるが、現地博物館関係者の協力を得るための交渉と、許可が得られれば収蔵庫の資料の記録など、今後も継続される海外調査の準備を兼ねた調査だ。

ドイツは、ヨーロッパでも日本研究がさかんな国のひとつで、日本文化を専門としている研究者が多い。また、昔ながらの地域独自の文化を伝えていくために、それぞれの地区で自主運営している博物館があり、史料館と相通ずるところもある。この機会に、日本ではめずらしい財産区で運営されている史料館を紹介しようと、パンフレット類やお祭りに配られる団扇などを持参した。その中のひとつに括猿があった。



▲ 括猿 (くくりざる)



▲ 祭りの時に着る法被に着けられた括猿

最初の訪問先は、ドイツの首都、ベルリン郊外にあるダーレム民族博物館である。ちょうど企画展として日本の郷土玩具が展示されていた。ダーレムのアジア展示のヘッドであるナーサさんは、ヨーロッパの日本文化研究の第一人者のひとりである。日本語が堪能で、もちろん日本文化への造詣も深い。手渡した括猿を見るなりすっぴかり気に入った様子で、これについてもっと詳しく知りたいという。また、ハンブルグ民族博物館では東洋担当のクヌーデルさんだけでなく、館長も「できるならミュージアムショップで販売したいのでどこで買えるのか教えてほしい」というほどの熱心さで、帰国後、



▲ ダーレム民族博物館での調査の様子

括猿について英文の説明文を送る約束を取り交わした。

なぜ括猿が、ドイツの博物館関係者の関心を引いたのかはわからない。お守りの類はたくさんあるし、彼らにとっては職業柄特にめずらしいものではないはずである。私自身これまで、括猿をことさら意識したこともなかった。しかし、改めて眺めてみると、いくつか不思議に思えることがあった。

そのひとつが、括られた手足である。括猿は日本各地に流布する郷土玩具の一種で「サルボボ」「サルボ」などと呼ばれることが多い。もともとは女の子の遊び道具であったが、それが子供の健康をお守りとして認識されるようになった。庚申信仰とも関わり合いがあり、千疋猿として軒先や店先に連ねて吊るされ、商売繁盛や災難除けを祈願することもある。似たような形の「這子」を原型とするという説もあるが、決定的な違いは這子は白色であること、そして手足が括られていないことだ。しかし守り神であるはずの猿をなぜがんにがらめに括る必要があったのだろうか。括った手足にはどんな意味があるのだろうか。

日本では、古くから結びや括りの文化が発達していると言われている。その行為には、単純に物をつなげるだけでなく、精神的な意味合いが含まれることが多い。もしかすると括猿は、普段私たちが何気なく見逃している、縁、契り、など結びや括りが持つ日本文化特有の香りをも少しだしているのかもしれない。そして、それがドイツの人たちの心を捉えたのではないだろうか。

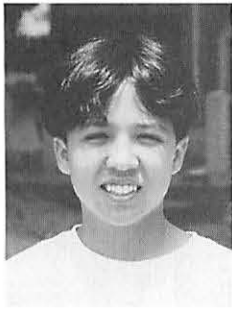
※ ドイツの博物館の調査は、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究(A)「我が国の科学黎明期資料の体系化に関する調査・研究―江戸のものづくり―」の計画研究A06a「一九世紀における日本在外博物学・民族学標本コレクションの実態調査」の一環としておこなわれたものである。

トライやる・ウィークと史料館

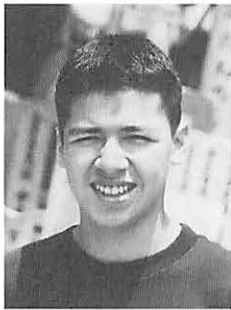
史料館研究員 水口千里

兵庫県が毎年実施している中学生の体験学習「トライやるウィーク」が、平成一四年も実施された。史料館では、毎年、本庄中学校の二年生を受け入れているが、本年度も六月六日、七日の二日間、大野純一君とジョスエ君が史料館での業務を体験することになった。六日は、収蔵資料の整理作業の一端として、資料台帳カードの作成をおこなった。資料のデジタルカメラによる撮影、パソコンによる画像処理、印刷、資料データの記入など実際の手順にしたがって、二人とも台帳カードを完成させた。

七日の午前中は、史料館近辺の史跡を調査し、フィールドワークの基礎を学び、午後は、史跡調査のデータ整理と季節展示コーナーの展示替えの体験をした。展示替えは、展示中の五月人形を梱包し収蔵庫に収納し、次の季節展示「夏の風物詩」に使用する資料を収



◀ 大野 純一くん



▶ ジョスエくん

蔵庫から出し、テーマに沿ったレイアウトを検討しながら実際に展示作業をおこなった。

二人とも、海外で過ごした期間が長かったためか、少し前の日本の生活文化をより新鮮なものとして受け止めていたように見受けられた。また、今後の博物館の整理作業で必要となるデジタル化にも関心が高く、二日間とも熱心に作業を取り組んでいた。



▲ 二人で力を合わせて展示替え。
ごくろうさまでした。

編集／望月 浩
『生活文化史』 第30号 02・11・15

発行／神戸深江生活文化史料館
〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-5-17
☎ 078-453-4980 (FAX兼用)